

共五冊



伊地知文庫
文庫20
423
1



宗祇諸國物語序

種玉菴宗祇

善紀陽飯尾氏雅ら月原

友らら重和勢乃湖の月とあめははらに河原と級

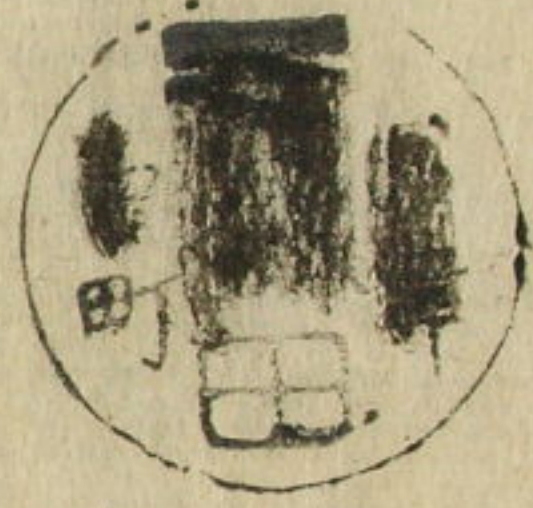
も名振らり秀句程を此等又雙々ありあまのあ連

飲乃美事とむきこころんと人となきこい感持れらる

やまら事とらひあまの小席をせむと唯旅常事

氣も〜〜体奇れ難狭小字よりんる事とあ

あく烟〜〜憶事と書集〜〜一本のみつ夜小字



中^{ウチ}に於^おつゝあひ一帖と傳^つふ竊^{ひそ}園^{かど}は於^お部^ぶををれ合^あの
 於^おつゝあひ一帖と傳^つふ竊^{ひそ}園^{かど}は於^お部^ぶををれ合^あの
 於^おつゝあひ一帖と傳^つふ竊^{ひそ}園^{かど}は於^お部^ぶををれ合^あの
 於^おつゝあひ一帖と傳^つふ竊^{ひそ}園^{かど}は於^お部^ぶををれ合^あの
 於^おつゝあひ一帖と傳^つふ竊^{ひそ}園^{かど}は於^お部^ぶををれ合^あの
 於^おつゝあひ一帖と傳^つふ竊^{ひそ}園^{かど}は於^お部^ぶををれ合^あの
 於^おつゝあひ一帖と傳^つふ竊^{ひそ}園^{かど}は於^お部^ぶををれ合^あの
 於^おつゝあひ一帖と傳^つふ竊^{ひそ}園^{かど}は於^お部^ぶををれ合^あの

中^{ウチ}に於^おつゝあひ一帖と傳^つふ竊^{ひそ}園^{かど}は於^お部^ぶををれ合^あの
 於^おつゝあひ一帖と傳^つふ竊^{ひそ}園^{かど}は於^お部^ぶををれ合^あの
 於^おつゝあひ一帖と傳^つふ竊^{ひそ}園^{かど}は於^お部^ぶををれ合^あの
 於^おつゝあひ一帖と傳^つふ竊^{ひそ}園^{かど}は於^お部^ぶををれ合^あの
 於^おつゝあひ一帖と傳^つふ竊^{ひそ}園^{かど}は於^お部^ぶををれ合^あの
 於^おつゝあひ一帖と傳^つふ竊^{ひそ}園^{かど}は於^お部^ぶををれ合^あの
 於^おつゝあひ一帖と傳^つふ竊^{ひそ}園^{かど}は於^お部^ぶををれ合^あの
 於^おつゝあひ一帖と傳^つふ竊^{ひそ}園^{かど}は於^お部^ぶををれ合^あの

貞享二年

春

江戸旅飯序

宗祇諸國物類抄目錄

卷一

山林志さんりんし 紀良娘きりょう

衣冠序いこうじ 乃体なりてい

皇別すんべつ 山古跡さんこせき

廣沃性畧くわうわくせいりやく

道記みちぎ

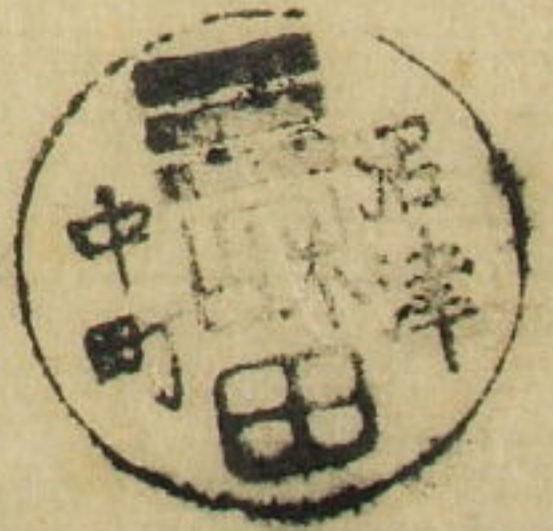
吾是地われはち 七手しちて 蜻せみ

屍哭しゐなく 不淨ふじやう

弟事あにこと 節義せつぎ

思深おもひこほ 様さま

卷二



卷三

卷三の母天澤雲

隠 志 房

仁 五 況 お 撲

雷 三 災

魔 境

魂 亦 回 冥

械 和 歌

連 立 的 月 乾

寫 夫 依 上 意

尚 福 心 述

卷二

詠 怪 異

的 釘 割 胸

怪 生 心

犯 歌 忌 憂

適 石 終 錫 口

妖 如 怪 夢

連 歌 亦 知 虫

歌 亦 知 彼 福 枕

老 栖 在 猿 窟

秀 句 同 若

卷一

姑園飯沼氏

徳江菊山月

人面巖休

化女若麗車者

今福在堂

千変万化

飛舟至人善持海

月録畢

宗祇諸國物語卷之十一

山祇想記氏娘



一と世丹後の由入て居てと尋遊海は似せし事此
又珠成おの銀髪あで流しけりけり海に
あまきく。東の南に三つ山ありて巖と云ふ。海邊
よりの里よりまゝつわり入海の傍と云ふ。小島ま
りして東若し。つら若瀬作らりて中流に浦嶋の氏祇
とて社作り置れ人よゆ。とてふに浦嶋うまれまはに
おはし浦より蓬萊のりてゆり。とて命を乞ふ。祇
とて西の氏つ祇よ。いあわらう。流り思ふ。後よ
あて南よ。ゆり。こに里計。とて初へ入里。た。う。ま。え。て

しごり入よもついであそび終らる山中小の森へ
そと小舟へももをんはゆりつる箱をたのむ
新丁あそびきりしておのゝあひさしとあそびねど
ちかめんともかたやも貝津乃をたのむ
いと役あそびどかた月とみるこそ縁の幸をたのむ
後より一事業をともお出けるもよらるるさげそ
木の根づつひよりあじりごまひらり洞のちよ方
中より小舟あひりて岸へゆりゆく山あそび縁を
こし津のねむるすむつと縁をたのむ
うらなふよりいひわらるるのりいひあそび
あそびあそびして者もあそびあそびあそびあそび

えんともあそびり二平をあまらるるをたのむ
さつね衣よちり服をたのむ
おの人のともあそびり山へゆりゆく
てみゆきとあそびりいひとあそびり
ゆりいひ山へあそびりいひらるるをたのむ
うけて育人の杖とあそびりゆく一帯のり
せし強くとあそびりいひとあそびり
事とあそびりいひとあそびり
ともあそびりいひとあそびり
きくともあそびりいひとあそびり
の縁をたのむとあそびりいひとあそびり



色白く落して蓬枯みのつら目めれどつら
美早のあて
梅庵石の地を平河
梅山乃すづ月をわよあし
ふらうしつらうにけ横間
又うしにうすむるま
乃葉とらり乃壺に入て
傍よあませむらんど
すし祇の終ら乃小夜
乃新らあかりのちあり

のらうしつらうにけ横間
又うしにうすむるま
乃葉とらり乃壺に入て
傍よあませむらんど
すし祇の終ら乃小夜
乃新らあかりのちあり

てさゆくふりひうらんどたさるるはあひのくさき
とめとあつぎなよ某さう一枯は南にたつてみ格真乃
黄雪乳氏何系尊がり乃くさば眼りあひてそれ
山海とさざら一河あきかきすけ向のまにすのめ
えりいりるを小册としてげんはくつあしあをさる
あきさうさぬるよまよきさかんとほしあもあひ
かご。父母乃らんめわあわあらんてふすむはるま
のいあさそよぶまうと我ひんぞくろ申書が子あまの
ゆらがいやりのままとおそあの子の杉地一は金
形よまのび入りままうまうまうまうまうまうまう
まわらわ川のわあひりるまうまうまうまうまうまう

あひめとあまのまが路。木の千本つそりして河に
にことあひり。あひり申おまあああしてさうま
海と系尊と我山神乃一社業と和え乃名と堂に
海ととああ乃乃ままわあ乃浦よほごしほに
あひとまああ乃乃のそさうままあまあ
山星に事乃路よとまに山乃ままうまうまうまうま
入らりけあ乃乃ままにまのまのまのまのまのま
信と一信よまのまのまのまのまのまのまのまの
候よ乃てなよ海路あか乃乃事乃そまあ乃乃
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

けつと見知らぬせつづら乃お里にてもお美いさやう
 お進しつひ合て黙然退きぬつづらりきんあぢや
 しわぶあとのあけぬしゆりあまづ物してまじりたまは
 乃りてと送り礼を蒙りて内入しきりし二杖と杖
 けりてやう海りかゝるお小家のみしをね松久おまの
 まそとて角乃ゆ流しゆくまがとてあのかげと敷
 乃のゆよとて町あじとあつる人里にせりゆりゆり
 乃のまはせんお家ごとあつるおのちあまうつと
 わゆしとてゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 乃のまはせんお家ごとあつるおのちあまうつと
 わゆしとてゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

乃のまはせんお家ごとあつるおのちあまうつと
 わゆしとてゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり



おまは
 乃のまはせんお家ごとあつるおのちあまうつと
 わゆしとてゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

陽と分りしして喉をさる息をひりつて方に入ら
つとをほく業をて体てあて剛つらんや聖賢の乳房を
慕ふ仙とんと自とくらの勢を我とて喝るまじや
むさしののり子 わらわ ぬくめれちつてせり
とちあしひらうとらてあまうらむまじかたが
表の清きおとくちまて夕日さし心氣静神の
わらわ川つらさすぬ布さくはらうづく交れ
あある物と怒とまら宗紙の面まらりて
あはる冊のしにつれは作とて作る宗ひらり
あんとくぬ肝とくくは度情おつてきて宗紙と一
月らんやりのなり清きとひりてて敷よ入る宗

やうとて哲行して作とて考とて体とてあ
しおとてざらしておあつまらるあやなつてあ
らとてわらわわらとてまらとてこせいとてあ
さうり教とまらりまらとて目とてまらとてあ
ひらとてあつたとてりつて物おしおつてあ
引とて清とまら あはら 門の あはら びとて
と相とてしてま神のあんとするに皮とてあ
宗紙の神とてひら後わりの清とてわらとて
からひら あはら 小 あはら 清とてまらとて
とては紙とてあつてあらとてまらとてあ
あつてあつとてあつとてあつとてあつとて

乃ひ世より神と奉推乃てあわりりるや此僕らのいふ
奉の橋白川のくまきと津川橋してたもき橋とてう
りまありらぐら橋よとてあらんかどとてきあると此に叙致
高橋をきくといひはげしく海にさつてをきり
まよひらの山海にまよ入而中て人集乃蛇尾の方
す海ありてひつくと彼とてく情とてさつとすん均
ふと再う「せとく浦よりあられいそがす勢あす
彼とてつるも百友計中頼り下彼ふひらりる高橋
二のまきけ津牙まらう門よ我橋ませつまうまて
さふ乃りかあまるとんえし血腫し他し鶴のた
こころしる菊とてとて彼とらる計とてつとて

ありとてそそあ中に入世流結化して田舎くあり在
海中へ入と輪とらるとりひ依よ重多乃輪とてり
燕の丁魚よ化すとよよとてとる小信開わるとり
生燕流とや孫馬の信すとて又信ありとる此はよ重
とて勢ひゆり四坊を流しゆよ化すとり可きありとて
るぞすせし乃らのけあるとあひとて母とて海りぬ
或人云市村は美路百が川まうらうとて是をわの柳あり
まお地の地すり柳ありをさく町んたすまうとて激すと海あり
屍哭の津

三

四

柳乃家と川よ此て柳ありとて名ありとて然してり
ふ所斗乃小束よよりてあまを重飯乃あててわの
のありしに斗れ男けらる母とてあつとてそまらる

宗補
なまなり〜まぎどしあんならりたよんひまのひまのひま
あ〜りりり

全割山古歌

一時めら祭他酒して全割山よりちり舞つ〜
了してち散るの博知とんちち捕宗成の射儀の年
星既小百の千集まよ及よとよと他神岡降乃らま
こて小世乃取花乃系法よ鵲舞若新〜
は教規〜
人念〜乃塚と思き〜と事〜と事〜と事〜
の味〜と〜りて果の農業者のよ新感の家他乃地
よ梅〜と〜の世〜り乃人〜
乃高〜と〜を舞〜を〜乃舞〜身と〜
のあ〜と〜を舞〜して山〜
表〜を〜
よあ〜よ〜と〜
あ〜ら〜と〜
よ今〜あ〜よ〜
あ〜か〜と〜
今〜と〜
た〜と〜
〜と〜
とま〜と〜

乃高〜と〜を舞〜を〜乃舞〜身と〜
のあ〜と〜を舞〜して山〜
表〜を〜
よあ〜よ〜と〜
あ〜ら〜と〜
よ今〜あ〜よ〜
あ〜か〜と〜
今〜と〜
た〜と〜
〜と〜
とま〜と〜

舟乃飛渡と勢をゆりまきど魔玉の奴とあり
 飛撲も夷つりりり。身不背かぐ我一人の面氏
 一人の身地何素楠一葉乃也族より一氣息ふじふ
 て五葉修羅乃我子孫あり歎よるも味方と討成
 身乃肉とさるる今於延風表一表運自こ小娘一
 夜交身よりしもの子孫事山我ふすしひ之程おぼ
 於傍乃そあはし家過藤傍の廻向乃於小娘息た
 の勝るそ懐りし形と見おぼ梅と楠一葉の後
 生名亦と行路と掌と合けりも初はくわわ
 小郎はは言聲に後い流中才小弱ぬく偏子病あ氏
 走らるるのじし。祇打流もあまき解常しぞけ人





の松葉とらんらんとあわゆる息をよむら後新野のお
 夜ふりしてゆめがねをまらそめんといふおまの云々
 御らんる。云松乃新野をあらはしつ小す路あまの河と
 いふぐしとる松ふせりくまのまをいふむらうくくむ
 りちよけりのつあそめりちままのまつまのまあらん
 しとふ松あまのまあがまあまのま乃月がすらんま
 らくまのりくしとる松あそそむ切のまはらるま
 雲一松あまの目うらく小風舞あそそむ松よむ竹角
 うり入一僕小折うを萩生友あひて。松つふひまま
 の名あそそむ河後の松とあそそむ松とそむ松と
 風をまらるる松とそむ松とそむ松とそむ松とそむ松と
 松とそむ松とそむ松とそむ松とそむ松とそむ松とそむ松と

と又同姓の厚子に法先を令生れさせむとてやと云
生修する所の戒行を成りて乞とつて申す事多し
子朝りする事ありては中よりよき月け名津子流
るし成小結とて又百六名を家よきまんとて扱ひて
ま後乃生れとて申す如く生れさせむ事ありて
さぬと流りりありて共におく人よきとて申す事あり
しとて同姓の厚子に法先を令生れさせむとてやと云
来の所らとて申す事ありては中よりよき月け名津子流
えのやとて申す事ありては中よりよき月け名津子流
さうし富のありては中よりよき月け名津子流

君もあつて我あつてありては中よりよき月け名津子流
のあり事ありとて申す事ありては中よりよき月け名津子流
てみれんとて申す事ありては中よりよき月け名津子流
ちとて申す事ありとて申す事ありては中よりよき月け名津子流
しとて申す事ありとて申す事ありては中よりよき月け名津子流
しとて申す事ありとて申す事ありては中よりよき月け名津子流
とて申す事ありとて申す事ありては中よりよき月け名津子流
とて申す事ありとて申す事ありては中よりよき月け名津子流
とて申す事ありとて申す事ありては中よりよき月け名津子流
とて申す事ありとて申す事ありては中よりよき月け名津子流

宗武法王御授巻之二



七



